

文化財ノート 1

万葉歌碑

中和泉四丁目 14 番にある万葉歌碑（玉川碑）は、大正 13 年（1924）に再建されたもので、当初は猪方四丁目辺りの多摩川のほとりにありました。

最初の歌碑は、文化 2 年（1805）に平井有三董威（元土浦藩士）により建立されました。当時、平井は 70 歳をこえていましたが、猪方村の名主重八宅に身を寄せ、手習師匠をしていました。その平井が石碑を建てることを思い立ち、江戸の知り合いなどに寄付をつのり、猪方村内の多摩川の堤防のほとりに歌碑を建立しました。碑文は白河藩主松平定信（楽翁）が万葉集の一首を揮毫し、碑陰記は白河藩の儒者広瀬典の撰文、同藩の大塚桂の書になります。その後、平井は重八とともに文政 2 年（1819）正月、猪方村の多摩川河原で松本幸四郎や岩井半四郎などの役者を江戸から呼び歌舞伎の興行をしています。当時、江戸近在でのこのような人集めは禁止されていたので、平井と重八は幕府に捕らえられ、重八は村追放、平井は百日手鎖の後、井伊領追放となり老年のために隣村の駒井村（天領）に移り、その地で亡くなっています。

文化 2 年に建てられた歌碑は、24 年後の文政 12 年の多摩川の洪水により流失し、行方知れずになってしまいました。そのため、この歌碑の形や大きさ、建てられた場所は不明のままです。

その後、大正 11 年（1922）に至り、楽翁を敬慕していた三重県人の羽場順承は、旧桑名藩士から歌碑の拓本（復刻）を手に入れ、歌碑がすでに流失していることを知り、その再建を計画し、楽翁に私淑する実業家の渋沢栄一に協力を依頼しました。8 月、東京府は旧在地の猪方半綱を史蹟に認定し、標識が立てられました。玉川碑跡は、現在でも東京都指定旧跡となっています。9 月 24 日には、中和泉四丁目 15 番にあった玉翠園内の林間学校で玉川史蹟講演会が開かれ、石井正義が「玉川碑の由来」、渋沢栄一が「玉川碑と白河樂翁公」などの講演が行われました。12 月には、歌碑の再興を図ることを目的とする玉川史蹟猶興会が成立しました。翌 12 年に入ると再建の募金が始まられ、3 月には渋沢は自ら 2,500 円を寄付するとともに財界に寄付を依頼し 2,150 円（23 人）を集め、総額は会員のものと合わせると 6,041 円余にもなりました。歌碑も 8 月ごろまでには現在地（当時は玉翠園前）にはほぼ完成し、秋には除幕式を予定していましたが 9 月 1 日の関東大震災により歌碑が倒れたために延期となり、翌 13 年 4 月 13 日雨天のなか現地で除幕式が行われました。

再建された歌碑は、高さ約 2.7 m、正面は楽翁書の旧碑の拓本を模刻、背面は旧碑の碑陰記と渋沢の撰文・書になる新しい碑陰記などが刻まれています。

多摩川に曝す手作さらさらに何そこの児のここだ愛しき（万葉集卷 14）

狛江市教育委員会

平成 4 年 3 月 31 日発行
狛江市和泉本町 1-1-5
〒201 電話（3430）1111



〔正面〕多麻河泊爾左良須

弓豆久利佐爾左良須

爾奈仁曾許能兒能

己許太可奈之伎

〔背面〕玉川碑陰記

水名玉川天下凡六在武州為其一而水道屢移間而莫得平井董威考索旧跡有年近者認之請我老公書其古歌一首以勒碑樹之於多麻郡猪方村而後古蹟屹然與貞石共立世夫顯微闡幽春秋之志董威其蓋學此乎况老公之信貽證于後世而有餘也而以為表乎

文化二年乙丑十一月

白河広瀬典謨 同藩大冢桂書

玉川史蹟猶興会
顧問子爵 渋沢栄一
同 東京府知事 宇佐美勝夫
同 衆議院議員 秋本喜七
同 北多摩郡長 宮城栄三郎
同 府會議員 石井寅三
同 会長 狛江村長 石井扇吉
副会長 郡會議員 石井正義
理事 四賢堂學人 羽場順承
同 村會議員 井上半三郎
同 同 本橋久八
評議員 調布町長 萩本貞輔
同 砧村長 安藤兵庫
同 千歳村長 岩本作太郎
同 神代村長 富沢晴明
同 三鷹村長 井上銀三
同 前郡會議員 飯田藤藏
同 狛江村助役 荒井太四郎

武藏玉川の地古より苧麻蚕糸に富む里人之を織り玉川に晒して朝廷に獻納す是れ万葉集に玉川に晒す手作の歌ある所以なり文化の初松平樂翁公里人の請により万葉集の歌を書して碑を建てしめたるに文政十二年の洪水に河堤壊決して之を失ひしより今方に百年に及べり狛江の里人石井扇吉石井正義羽場順承等之を惜み數次発掘を試みたれども遂に得ること能はず因て玉川史蹟猶興会を起し旧碑の拓本を模刻し以て此地を顯彰せんとす余が樂翁公に私淑し又名勝保存の志あるを以て援助を請ひ且事由を碑陰に記さしむ願ふに玉川の地万葉の時には東鄙の一水郷のみ然るに皇都の東京に焼められしより輦轂に近邇するを以て冠帽裾履常に山紫水明と相映ず今又貞石を建てゝ近く名相の芳躅を伝へ遠く奈良朝の古風を追懷せんとす是亦昭代の恩徳ならずや此地を過ぎて此碑を見る者希くは感發する所あれ

大正十一年十一月二十七日

正三位勲一等子爵渋沢栄一撰并書

印

石工吉沢耕石刻

正義書